

英語学習における日・英両語の比較研究

そ の 一

— 応答文に見られる問題点 —

常 松 正 雄

1. 言語は人間の「社会的行為の一形態である」(a form of social behaviour)と一般に云われている。従って、「或る言語は、それを母国語として話す人々の行動様式及び思考様式を反映せずにはいないものである。」(A language cannot help reflecting the ways of behaviour and thought of the people who speak it as their mother-tongue.)¹⁾これを裏返してみれば、この事実が外国語を学習したり教えたりする場合に特殊な困難点を生み出すことが推察される。事実ラドーはその名著「文化と言語学」の基礎仮定として次の如く述べている。

「…人は母国の言語と文化の形式や意味、また意味の分布を外国語の言語や文化に——その言語を話し、文化の中で生活しようとする積極面と、その国の人達が話す言語や、その文化を理解しようとする受容面において——転用しようとする傾向がある」(… that individuals tend to transfer the forms and meanings, and the distribution of forms and meanings of their native language and culture—both productively when attempting to speak the language and to act in the culture, and receptively when attempting to grasp and understand the language and the culture as practiced by natives.)²⁾

またクロスも次の言葉に我々の注意を向けている。即ち、「困難点一つ一つの精確な程度及び性質、特にそれを教える場合の扱い方は、学習者の母国語に大いに依存することになる。」

(The exact degree and nature of each difficulty, and particularly the treatment of it in teaching, must depend largely on the structure of the student's own language.)³⁾と云う。

こういう観点に立って言語学習を見つめると、英語教育において、学習者がぶっつきりような困難点を教師が予測して学習効果を挙げるには、どうしても学習者が学ぼうとしている外国語と、その学習者の母国語との比較研究が必須となってくる。

1.2 最近では、いわゆる構造言語学が我が英語教育界に導入、応用されるようになり、日・英両語の比較研究もかなり行なわれつつあるようであるが、何分、言語という誠に複雑な道具を対象とすることとて、まだそれは断片的段階を歩んでいると云ってもよかろう。筆者も誠に浅はかながらも、過去英語教師として、正規の授業は勿論、英語クラブ等の課外活動を通して中学生から大学生までを教えてきた経験から、彼等の英語学習上の一つの困難点が応答文にあることを知り、その問題点を探究してきた。本小論においては、「質問」に対する「答の文」を作る場合、英語学習中に生徒が出くわす可能性のある点を、日・英両語の比較をしながら引き出し、その扱い方を考えてみたい。

2. 「答の文」を検討する際、我々がまず考えなければならないことは、「質問」に対する「答」は「その構造上の配列は、それを引き出した質問との関係において有意義である。」(… their [answers to questions] own structural arrangements have significance with reference to the questions that elicited them.)⁴⁾という、フリーズの言葉である。之に従えば、我々の第一の仕事は引き出される反応の種類によって英語の「質問」の型を二つに分けることである。その分類は一般的に次のようになる。

(a) yes 又は no を必要とするもの。これらは云うまでもなく、主語と動詞(又は助

動詞)の語順を変えることによって作られる。

(b) 「答」の中に新しい要素を必要とするもの。これらは疑問詞で始まる。

ところで、(a)群の「質問」に対する「答」の出てくる範囲は、実際は「機能語 yes 及び no を使うよりもっと広いがそれは比較的限られている。」(The range of responses [to questions of group (a)] is wider than the two function words ⁹⁾ yes and no, but it is still relatively limited.) 一方、(b)群の「質問」に対する「答」は「最も変化に富み、実際、他のどんな文の場合よりも広範に亘っている。」(… show the widest variety of all, wider than that of any other kind of sentence.)⁷⁾

従って、これだけ変化に富んだものを前にしては、「いろいろな可能性に亘って体系的な記述を行なうことは不可能である。」(…no formal description can cover the possibilities.)⁸⁾

以上を考察して、本小論においては上記(a)群に対する「答」の場合のみに限って検討を進めて行きたい。

2.1 上述した如く、(a)群に属する「質問」に

対する「答」は、yes 及び no を使用する場合以外もあるが、本論においては教育上の見地からそれは無視して yes と no が出てくる場合に限って論を進めることにする。

さて、英語の yes と no は、フリーズによれば「普通それらが導入する発話によって支持される肯定と否定の意味を持つ」(They have a meaning of affirmation and negation which is usually supported by the utterance they introduce.)⁹⁾ 機能語となっている。即ち、これはその用法において「事実と関連していなければならぬ。」(There must be correlation with the fact.)¹⁰⁾ つまり、yes は肯定の事実と、又 no は否定の事実と相互関係を持つことになる。一方、日本語の「はい」と「いいえ」はどうであろうか。それらは英語の yes や no とは違って、事実と、「答」を引き出す「質問」の形式との関係に基づいて使われる。即ち、「はい」は肯定関係、つまり「質問」と「事実」という二要素の相互関係に対する一致を表わし、「いいえ」は否定関係、つまり、二要素間の相互関係に対する不一致を表わす。これを例によって示すと次のようになる。

英 語

(表 1)

	質 問	事 実	答
肯定 又は 否定	Is he an American boy?	→ 肯 定	→ Yes, he is.
	Isn't he an American boy?	→ 否 定	→ No, he isn't.

日 本 語

質問文の形式によって次の二つの場合が考えられる。

- (A) 質問文の形式が肯定の場合。
- (B) 質問文の形式が否定の場合。

(A) の 場 合

(表 2)

	質 問	事 実	答
肯定	彼はアメリカの少年ですか。	→ 肯 定	→ はい、そうです。
		→ 否 定	→ いいえ、そうではありません。 (ちがいます。)

(B) の 場 合

(表 3)

質 問		事 実	答
否定	彼はアメリカの少年ではありませんか。	肯定 → いいえ、そうです。 (アメリカ人です) 否定 → はい、そうではありません。 (ちがいます)	

表1—表3に亘って述べたことをまとめると、(a) 英語では、答を引き出す質問文の形式は答の文における yes 或は no を選ぶことには関係しない。一方、日本語では、答の文における「はい」或は「いいえ」を選ぶのに、質問文の形式が影響を与える。(b) 英語では、機能語 yes 及び no は事実と必ず一致しており、しかも、yes 又は no はそれぞれ導入する答の文とも相互関係を持ち、必ずその肯定・否定の関係が一致している。即ち、「事実」・「yes 又は no」・「答の文」の三者間における「肯定・否定関係」は常に一致している。

一方、日本語の場合を検討してみると、答の文における「はい」と「いいえ」は質問文と事実の間に存する肯定・否定関係に対して一致又は不一致を表わしており、「はい」又は「いいえ」と、それぞれが導入する答の文との肯定・否定関係は必ずしも一致しない。即ち (a') 質問文が肯定の場合には、「事実」・「“はい” 又は “いいえ”」・「答の文」の三者間に形式的に「肯定・否定関係」の一致が見られる。が、(b') 質問文が否定の場合には、「“はい” 又は “いいえ”」は「事実」及び「答の文」との間に「肯定・否定関係」において常に逆の関係が見出される。これを要するに (a') の場合にはそれに対する英語の表現形式と比べて何等差異を認めないが、(b') の場合には日・英両語の表現形式に大なる違いを認めざるを得ない。此の点において、クロッスの云う言語における行動様式及び思考様式の反映を見るのである。従って此処には我々が英語を学習し、又は教授する場合に困難点の生ずることが予測される。事実フリーズはこの点を次の如く述べて否定疑問文が日本人にとって如何に困難な事項であるかを指摘している。即ち、「その場でのテスト」によ

て明らかになった所では、日本人——相当英語を把握した人たちにさえも——特に困難な構造上の事項の一つは否定疑問文である。」(One of the structural items that the “spot tests” revealed as especially difficult for Japanese, “even those with considerable control of English” was the negative question.)¹¹⁾ しかも、「否定疑問文は、英語を生まれながらに話す人が話す場合には、話者自身が実際感じているより遙かに頻繁に起こっている。」(The negative question occurs much more frequently in the speech of native speakers of English than the speakers themselves realize.)¹²⁾ と、フリーズはその使用頻度の多いことも指摘している。彼の研究によると、東京のある食堂で生まれながらにして英語を話す一人の外人が使う英語を数ヶ月に亘って観察した処、「その外人が女給仕さんに発した質問を記録したものの中、約90% は否定疑問文であった。」(Nearly 90% of the recorded questions asked the waitresses by this native English speaker were negative questions.)¹³⁾ と述べている。否定疑問の形がこれ程頻繁に使用されるとすれば、この形式は我々の英語学習においても今少し真面目に取扱われる必要があると思われる。

3. 以上のことから、我々が英語の否定疑問文と取組む場合に、yes = 「はい」、no = 「いいえ」という単語としての意味のみからくる観念を持って出発すると、次のような問題が起ることが予測される。

3.1 (A) 受容 (Reception) における問題点

- a) Isn't it a fish? No, it isn't.
- b) Doesn't it live in the sea?
Yes, it does.
- c) Aren't you younger than Jack?

Yes, I am. I'm younger than Jack.

d) Isn't Jane the youngest?

No, she isn't. Kate is the youngest.

上記 a), b) は New Prince Readers (開隆堂) (以下開隆堂と呼ぶ) 2 の 3 課から, c), d) は New Approach to English (大修館) (以下大修館と呼ぶ) 1 の 13 課からそれぞれとったものであるが, 英語では先に 2.1 の表 1 に述べられたように yes, no は各々「事実の肯定」又は「事実の否定」を表わしている。所が日本語ではこういう場合同じく 2.1 の表 3 に述べられたように「はい」又は「いいえ」は「質問文」と「事実」との間に存する「肯定・否定関係」に対する一致又は不一致を表わすため, 日本人学習者は上記 a) の場合を「いいえ, 魚ではありません。」以下, b) を「はい, 住んでいます。」, c) を「はい, 若いです。」, d) を「いいえ, 一番若くはありません。」とそれぞれを受け取りがちであろう。これはそれぞれ答の部分だけに独立したのものとして受取られれば日本語が表わしている表面的なものは決して不合理でも何でもないであろうが, 一旦, それぞれを引き出した質問との関連において吟味すると, どれも皆受取り方のずれが明らかになってくるであろう。即ち, a) は「はい, 魚ではありません。」, b) は「いいえ, 住んでいます。」, c) は「いいえ, 若いです。」, d) は「はい, 一番若くはありません。」と, それぞれ「はい」, 「いいえ」を逆にする方が英語の表わす気持ちを伝えるには理に叶っていることになる。

こういう形の応答文を正確に理解させるためには, 教師は, 「答」が a), b), のように短かい形で終わっている場合には, 必ず c) のように「事実」を明確に把握させる拠り所となる文を加えて説明してやるか, 或は, 生徒たち自身にそういう「事実」をはっきり示す文をつけ加えさせたら効果が挙るであろう。

(B) 発表 (Production) における問題点

a) Isn't a pencil bigger than a bat?

(開隆堂, 2, 第 3 課)

b) Don't you like English? (大修館,

1, 第 25 課)

上記は何れも, それぞれに対して英語の答を要求しているが, この場合は上記(A)の逆の問題が起こってることが予測される。これらの英語の問の「事実の肯定」は日本語では, a) が「はい, 大きくありません。」, b) が「はい, 好きではありません。」となり, 「事実の否定」は同じように, a) が「いいえ, 大きいです。」, b) が「いいえ, 好きです。」となる。従って, 生徒はこういう日本語のアイデアから英語にアプローチして答を出す時「事実の肯定」の場合, a) は, Yes, it isn't. となり, b) は, Yes, I don't. となることが予想され, 「事実の否定」の場合には, それぞれ a) が No, it is. b) が No. I do. となることが予測される。これらは上記 2.1 で述べられた理由により yes, no はそれぞれ後続の答の文の事実と一致すべきであり yes, no を逆にしなければならないことは自明のことである。

こういうふうと考えてくると, 特に否定疑問文に対する答を取扱う場合には yes = 「はい」, no = 「いいえ」という辞書的な概念を生徒に植えつけたこと自体に根本問題がありそうに思える。一体「語」は音, または音連続より成り, それがある文化, ある言語地域社会に属する聴者にある種の反応を起こさせるものである。(A "word" consists of a sound, or a combination of sounds, that has become conventionalized in a culture or a linguistic community, that is commonly used in certain situations, and that stimulates certain responses in a hearer belonging to the same community.)¹⁴⁾ から, 「語の真の, 正しい意味といえるのは, ただそれが用いられる場面だけである。」(The only true and correct meanings of words therefore are the situations in which they are used.)¹⁵⁾ という点に注意を向けなければならない。こう考えると, 否定疑問に対する「答」としての yes 及び no の受け取り方は, no = 「not である」, 「no one である」, 「never である」, 「nothing である」
yes = 「notでない」, 「no one でない」,

「never でない」, 「nothing でない」¹⁶⁾

と考えた方が, 「場面」に即した把握ができそうに思える。

3.2 応答文を検討する場合, 今一つの問題はいわゆる付加疑問文と答との関係である。

ここで先ず注目すべきは付加疑問文の形である。これを示せば次のようになる。

(表 4)

	陳 述 部	付 加 部
英 語	You like flowers,	don't you? *
日本語	あなたは花が好きです	か 又は ね

* 開隆堂 3c 第2課

(表 5)

	陳 述 部	付 加 部
英 語	You don't like flowers,	do you?
日本語	あなたは花が 好きではありません	か 又は ね

(表 6)

質 問		事 実	答	
陳 述 部	付 加 部		英 語	日 本 語
肯 定	否 定	肯 定	Yes, I do.	はい, 好きです。
You like flowers,	don't you?	否 定	No, I don't.	いいえ, 好きでは ありません。
否 定	肯 定	肯 定	Yes, I do.	いいえ, 好きです。
You don't like flowers,	do you?	否 定	No, I don't.	はい, 好きでは ありません。

ここでも, 3.1 で述べられたことと共通した問題が起ってくる。英語の答の方は「質問(陳述部, 又は付加部)」, 「事実」, 「答」の三者間に一定の肯定・否定関係を持っているのに対し, 日本語の場合, その答は常に「質問」の中の陳述部のみに対する一致又は不一致の形で作られる。従って, ここに起ってくる問題は「質問」の陳述部が否定の場合に限られ, 結局その性質は, 3.1 で述べられた否定疑問文に関する場合に似てくる。

即ち, 付加疑問文の形は, 日・英両語とも「陳述部+付加部」という構造を持っていると考えられる。そして第1要素である「陳述部」は語順の相違を除けば, 日・英両語間に形式上大差は認められない。一方, 第2要素である「付加部」においては, 英語では「助動詞(又は be その他)+主語」という形を持ち, 且つそれが「肯定」又は「否定」を表わしているのに対し, 日本語では「か」又は「ね」という「助詞」一語がきており, それは「肯定」, 「否定」の関係は何等表示していない。以上の背景を考慮すれば, 日本人学習者は英語の付加疑問文に答える場合に, その付加部の「肯定」又は「否定」表示の事実には先ず注意を払わないだろうと推測できる。従ってその第1要素である「陳述部」のみを考えて「答」を出す可能性がでてくることになる。従って, この付加疑問文の場合の応答文の関係を示すと次のようになるであろう。

3.3 応答文で今一つ日本人英語学習者がその初期の段階において誤りを犯すものを選択疑問に関するものがある。勿論この場合「答」の方には, 日・英両語とも肯定・否定を表わす yes, no 或は「はい」, 「いいえ」を使用しないのが正しいのであるから, 一見問題はなさそうに見える。しかし, 実際教室では教師の Is this a bottle or a box? (開隆堂, 1, 第3課) という質問に対して, 生徒は Yes, it is a box. という答を出す場合がよく見受けられる。その

原因は何処にあるであろうか。勿論、この誤りは、この選択疑問という形が出てくるまでに、生徒は、英語では答に必ず yes 又は no をつけるのだという習慣形成が徹底した結果に由来するとも考えられる。

しかし、此処で日・英両語の構造を今一步突込んで考えてみよう。

(英 語) Is this a bottle or a box? ……(a)
 (日本語) これはビンですか、或は箱ですか。
 ……(b)

即ち、(a)の場合は、or を中心にしてその前後

に「単語」を置いて選択させるのに対して、(b)の場合は、「或は」を中心にしてその前後がただ一ケの単語ではなくて、一応「文」の形をもったものが置かれている。従って(b)の場合は、事実上「或は」を中心にして前後二つの疑問文があるように感じられる。それ故、答える方では、つい「或は」の後の要素を中心にして考え、それに一致する場合は yes を、又、一致しない場合は no をうっかり使ってしまう結果となるであろう。これを表示すれば下記のようになるであろう。

(表 7)

質 問	事 実	答	
		英 米 人	日 本 人
Is this a bottle or a box?	box	It is a box.	Yes, it is a box.
Is this a box or a bottle?	box	It is a box.	No, it is a box.

この場合は、従って、特に「発表」の場合にこのような誤ちの出てくる可能性を予測して指導すべきであろう。

4. 以上に述べた応答文に見られる問題点をまとめてみると、普通は、「質問」が肯定の形で出てくる場合には、「受容」及び「発表」の両面において日本人英語学習者には問題点はない。しかし、「質問」が否定の形で出てくる場合には、日本人英語学習者は「答」における「肯定・否定関係」の受け取り方、及び発表の仕方において最も複雑な戸惑いを感じるであろう。そして、この困難は「発表」の段階においてその困乱度が高い。

従って、応答文の学習指導を行なう場合、教師は「質問」の形が否定の場合に特に注意を払い、とりわけ、それと関連した「発表」段階に生徒の注意を向けさせる必要があるであろう。その際、注目すべきことは次の事項であろう。

- 1) 「質問」の中の肯定・否定の別には気を取られないこと。
- 2) 「答」の中で肯定、否定を表わす yes 又は no 選択の決定は「事実」、即ち、「答」の中の yes 又は no がそれぞ

れ後に従える文の肯定・否定に一致させる。従って、yes 又は no の持つ概念は

- no = 「not である」, 「no one である」, 「never である」, 「nothing である」
 yes = 「not ではない」, 「no one でない」, 「never でない」, 「nothing でない」

と受け取る。

- 3) 英語の質問が否定の形で出てきた場合、それに対する答では大抵の場合、日本語の「はい」、「いいえ」とは逆に yes, no を使うつもりでいること。
- 4) 答に関する「受容」及び「発表」において特に困難点がありそうな場合には、Yes, it is. No, I don't. などのような「短かい答」よりも、Yes, it is a book. とか、Yes, it is. It is a book. というふうに、「長い答」又は「短い答+長い答」という形を出した方が理解し易くなること。

以上、本小論においては、日本人が英語学習

を行なう際に出くわしそうな問題点の幾つかを、日・英両語の比較を行ないながらみてきた。応答文と一応呼んだものも、此処では主として「質問」に対する「答」に限ったが、上に述べられた問題は、「命令」「要求」等に対する反応の場合にも当て嵌まるであろうし、音調という要素も考慮に入れると、「平叙文」の場合にも問題は出てくるであろう。

何れにもせよ、言語学習においては、複雑な構文から一つ一つの語彙項目に至るまで、すべてそれが使用される「場面」との関連において取扱われることが肝要であり、このことが注回しているようで結局は問題解決の根本となることを肝に銘ずべきであろう。

SUMMARY

Since a language is a form of social behaviour, it reflects the ways and behaviour and thought of the people who speak it as their mother tongue. This means, on the other hand, problems in learning and teaching a foreign language must be solved through comparative studies of the foreign language that the learner is trying to master and his mother-tongue. After such efforts, we can distinguish the problems that are unique to the learner who has been brought up in a certain language community, and the result is that we shall be able to direct him to a more effective learning of a foreign language.

In this light, this short study is devoted mainly to some of the probable difficulties of the Japanese learners of English which might occur in connection with the English response patterns. Taken as a whole together with the questions that elicited the answers, the English response patterns present to the Japanese no difficulties to be mentioned, when the questions are in the affirmative; while they do offer rather confusing problems, when the questions are in the negative. Especially difficult for the Japanese learners of English is

concerned with the affirmative-negative decision. Such a difficulty lies in the fact that while in English the decision is made according to the basis of the status of fact, in Japanese, the relationship between the fact and the forms of the preceding question is the deciding factor. Accordingly, in Japanese, whatever the fact is, the decision of the affirmative or the negative is made on the basis of whether the speaker agree to the statement in the preceding question or not.

Although the difficulties in these cases will be cleared away through a systematic production drills with these patterns, since in most cases receptive difficulties will die away after a certain pattern or a vocabulary item, etc. is productively mastered, a more fundamental matter is the conceptions of the function words *yes* and *no*. If the Japanese equivalents "*hai*" and "*ie*" are given in a hasty connection, no confusion may be cleared away from the mind of the Japanese learner of the English response patterns. On the other hand, it would help him to solve problem, if he grasps the conceptions of "yes" and "no" as follows: "no" as "it is 'not'," "it is 'no one'," "it is 'nothing'." While "yes" as "it isn't 'not'," "it isn't 'no one'," "it isn't 'never'," and "it isn't 'nothing'."

After all, a language, from the complicated structure down to each vocabulary item, ought to be learned in connection with the situation in which it is used. This is the essential factor to the solution of such difficulties as those treated in this paper.

September 1, 1962

NOTES

- 1) I. Morris, *The Art of Teaching English as a Living Language* (London, 1954), p. 2.
- 2) R. A. Close, *English as a Foreign Language* (London, 1962), p. 21.

- 3) Robert Lado, *Linguistics Across Culture* (Ann Arbor, 1958), p. 2.
- 4) Close, 前掲書, p. 14.
- 5) C. C. Fries, *The Structure of English* (New York, 1952), p. 165.
- 6) W. N. Francis, *The Structure of American English* (New York, 1958), p. 422.
- 7) 同 上
- 8) 同 上
- 9) Fries, 前掲書, p. 102.
- 10) C. C. Fries and A. C. Fries, *Foundations for English Teaching* (Tokyo, 1961), p. 16.
- 11) 同 上, p. 15.
- 12) 同 上
- 13) 同 上
- 14) C. C. Fries, *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (Ann Arbor, 1945), p. 43.
- 15) 同 上
- 16) 吉野義人, “科学的英会話独習法” 時事英語研究 1954年6月, 64.
- York: Harcourt, Brace & Co., 1952.
- _____, *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1945.
- Fries, C. C. and Fries, A. C. *Foundations for English Teaching*. Tokyo: Kenkyusha Ltd., 1961.
- Lado, Robert. *Linguistics Across Culture*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1958.
- Morris, I. *The Art of Teaching English as a Living Language*. London: Macmillan & Co. Ltd., 1954.
- フリーズ著, 太田朗訳, 解説, 外国語としての英語の教授と学習 東京: 研究社 昭和32年.
- ラドー著, 上田明子訳注 文化と言語学 東京: 大修館 1959.
- 日本放送協会 (編) 私たちの言語生活 東京: 宝文館 昭和32年.
- _____. ことばの使い方 東京: 宝文館 昭和32年
- Kim, Soon-Ham Park. “The Meaning of Yes and No in English and Korean,” *Language Learning* XII (1962) No. 1, 27—46.
- 宮地 裕, “いわゆる「文の性格上の種類」の原理とその発展 “国語国文XXIII (昭和29年) No. 11, 551—562
- 吉野義人, “科学的英会話独習法” 時事英語研究 1954年6月, 64.
- New Prince Readers* 1, 2, 3c 東京: 開隆堂, 1962.
- New Approach to English* 1, 2, 3c 東京: 大修館, 1962.
- (昭和37年9月5日受付)

参 考 文 献

- Allen, W. Stannard. *Living English Structure for Schools*. London: Longmans, Green & Co., 1958.
- Close, R. A. *English as a Foreign Language*. London: George Allen & Unwin Ltd., 1962.
- Francis, W. N. *The Structure of American English*. New York: The Donald Press Co., 1958.
- Fries, C. C. *The Structure of English*. New